

3/15 日豪越トライアングル
同時凧揚げプロジェクト

大空に震災復興と平和の願いを掲げる

「日豪越トライアングル同時凧揚げプロジェクト」は3月15日、藤沢スポーツプラザと藤沢公民館の駐車場で、市内の小中学生ら約170人が手作りにした凧を高く揚げて震災の復興を願った。

今年で3回目となる同プロジェクトは、市と藤沢町国際交流協会(高橋義太郎会長)が企画。2011年に洪水の被害を受けた国際姉妹都市のオーストラリア・セントラルハイランズ市と東日本大震災で被害を受けた本市が、互いの復興を願い絆を深めたことが始まりだ。今回は学生を招いて交流を深めているベトナム・ホーチミン市も参加した。

同日は、両市と交換したたこに文字や絵、参加者のメッセージを加筆した。震災犠牲者に黙とうを捧げ、日本時間10時30分にたこ揚げを開始。同じ空の下、復興と平和の願いを風に乗せた。

黄海小の橋本凧太郎くん(5年)は「震災の復興を願いながら、できるだけ高く揚げたい」と笑顔で大空を見つめた。



1_震災の復興と平和の願いを込めてたこを揚げる参加者 / 2_メッセージを記して交換したたこが豪越両市で揚げられた

3/14 図書館が果たす役割と
復興・防災を考える

図書館総合展2015フォーラムin一関

図書館総合展2015フォーラムin一関は3月14日、一関文化センターで開かれ、全国の図書館関係者ら約200人が震災の記録と防災に果たす図書館の役割を考えた。及川和男一関図書館名誉館長は講演で「震災を忘れずに次の世代に伝えることが大切。記憶を風化させない記録の保存と活用は重要」と呼びかけた。

パネル討論の「東日本大震災と岩手」では、長谷川敬子陸前高田市立図書館副主幹が「被災者の心の復興が大切。図書館は心を癒す居場所でありたい。失った郷土資料の確保と保存につとめ、後世につなげたい」と話し、これからの図書館運営の思いを伝えた。

「震災アーカイブの構築と活用」では、国や民間などが進めている震災の記録を未来に伝える取り組みを紹介。資料の活用方法や課題を話し合った。竹内秀樹国立国会図書館電子情報流通課長は「震災の経験を生かすために、横のつながりを大切に、これからも記録を保存し続けたい」と意欲を見せた。



3_震災の記録と防災への活用などを熱心に議論するフォーラム / 4_作家の視点から震災記録の大切さを呼びかける及川名誉館長



3/11 追悼
夢あかり

「追悼夢あかり一関(同実行委員会主催)」は3月11日、市役所前の噴水広場で行われた。市内外から約300人が参加。震災で犠牲になった人たちのために、被災地の早期復興を願った。

小岩登志子実行委員会代表(72)は「1日も早い復興を一関から祈りましょう」とあいさつ。参加者は「3・11」の形に並べた竹筒と夢あかり一つ一つに火をともした。この火は阪神・淡路大震災で被災した神戸市の「神戸希望の灯り」を分灯したものだ。

当時のような冷たい雪と風が吹きつける中、被災地に向けて黙とう。温かい光を放つ夢あかりを前に、全員で復興支援ソング「花は咲く」を合唱した。

一関修紅高の志羅山ひかりさん(2年)は「記憶を風化させないように支援活動が続けていきたい」と震災復興に思いを寄せた。

特集 希望のかけ橋

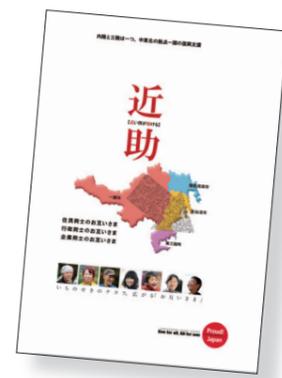
東日本大震災から4年。私たちは寄り添い、支え合い、助け合って暮らしてきた。あの日々の記憶は心に残っているだろうか。あの日々の教訓は生きているだろうか。市内で行われた震災に関する数々の取り組みを取材。「今の私たちができることは何か」を追った。

3月11日は、今後の進むべき道を考える日だ。市は2012年12月、3月11日を「となりきんじよ防災会議の日」に制定した。震災の記憶を風化させないために、教訓を語り継ぐために、家庭、職場や地域で身近な人と語り合おう日だ。復興を合言葉に重ねてきた1461日。被災地への思いや震災への意識は少しずつ変化している。しかし、市内には現在も596世帯(1215人)が避難し、暮している。

また、東京電力福島第一原発事故に伴う放射線の影響で、原木シイタケ露地栽培は国の出荷制限指示が続いている。

そう、震災の被害は、今も一関で続いているのだ。今、何を考え、どのように行動すべきなのか。もう一度あの日を思い出し、共に明日を考えたい。近い所が助ける。

「近助」の精神を持つ私たちがだからこそ、できることがあるはずだ。



3/11 南小学校で
「食から考える復興教育の日」

「当たり前」の大切さを再確認

「食から考える復興教育の日」は3月11日、南小学校(沼倉祐子校長、生徒505人)で行われた。震災教育の一環として、今回初めて取り組んだ。4年前の体験を忘れないように、昼食は持参した「おにぎり」だけを食った。

昼食を前に沼倉校長は「震災では怖くて辛い経験をしました。時が経ち、当時の記憶は薄らいでいます。苦しかった当時に食べた食事を思い返し、当たり前前に生活ができることを感謝しましょう」と児童に語りかけた。各教室では震災を振り返り、困ったことなどを話し合った。

渡辺成海くん(6年)は「震災は2年生のとき。大きな地震の揺れが今も記憶に残ります。今日のおにぎりはお母さんと作りました。震災を思いだし、食べ物のありがたさを感じました」とおにぎりをおいしそうに頬張っていた。

南小学校では、これからも3月11日を「食から考える復興教育の日」と定め、震災を風化させない取り組みが続いていく。



5_感謝しながらおにぎりを美味しくそうに頬張る児童 / 6_震災時に苦労した体験を振り返る先生と児童